

重点取組分野	令和 7 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①単元目標を明確にし、その中で伸ばす資質・能力を明確にした授業づくりを目指す。本時のめあての確認と振り返りの時間を設け、子どもが判断したり、選択したりしながら主体的に学びを進められるようにする。②重点研究のテーマを「自ら学び ともに考え 行動する台小の子」とし、主体的、協働的に自己調整力を高めようとする姿勢を育成する。	①単元目標や学習課題を意識して授業づくりに努めることができた。振り返りの時間は、学年や児童の実態に応じて形式を工夫して行っていた。その振り返りが、次への学びへと繋がり、児童が自らめあてを立てるなどの意欲付けもできた。②主体的、協働的な学びを教科や単元ごとに工夫し、どの場面でのような学習体制にするかを考えて、自己調整力を高めることに努めた。	B
道徳教育	①「考える道徳」「議論する道徳」を目指し道徳の時間に課題を設定する問題解決的な学習を実践し、一人ひとりの道徳性を育む。②道徳科年間指導計画を見直し、自らの課題として道徳の授業に取り組んでいる計画を立てる。③全クラス担任が研究を深め、重点研究会を通して多面的、多角的な見方を広げる指導ができるよう授業力の向上を図り、年に1回は授業公開をする。	①学校教育目標の副主題を意識し、「自分の思いから学習を広げる子」「自分の言葉で語れる子」「学びを生かそうとする子」を、どのように伸ばすのかを考えて授業を構成することで「考える力」が身につけてきた。しかし、議論できるまでには至らなかった。②行事や授業を見通してカリキュラムを編成することができた。③研究授業を通して学び合い、授業力向上につながる様々な手立てを増やせた。	B
健康教育	①家庭と連携し規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や保健教育、安全教育を実施する。②運動集會を柱に、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり体力の向上に目を向けたりすることができるようにする。③学校保健委員会を年に2回実施し、健康について考える機会を設ける。	①長期休業中にけんこうカレンダーを配付、また月一回の「ほけんのはなし」と「ほけんだより」を運動させることで、家庭や子どもたちに健康について考えるきっかけを設定した。②③学校保健委員会や運動集會では、年間を通して「歯磨き」を取り上げた。運動集會を実施したりペア学習で遊ぶ取り組みをしたりしたが、外遊び活発化には課題が残った。	B
自分づくり教育(キャリア教育)	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	①可能な範囲で地域行事に参加したり、外部講師を招いたりして、地域との関わりを深めながら児童一人ひとりの活躍の場を設けた。②学期始めや年度末、運動会などで振り返りを行い、キャリアパスポートに綴って成長を確かめられるようにした。	B
いじめへの対応	①「横浜こども会議」等、子どもたちがいじめについて話し合う機会を意図的に設定し、未然防止への取組を強化する。②1月1回以上定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、職員がいじめに対するアンテナを高々張ることを通じて、未然防止への取組強化とする。認知された案件の経過観察を丁寧に行うことで再発防止に努める。③YP、いじめアンケート、毎日の健康観察等を通して、子どもの小さな変化をチームで捉えられる体制づくりに努めた。	①いじめ未然防止の取組を強化するために、横浜子ども会議等子どもたちがいじめについて話し合う機会を意図的に設定した。②1月1回以上定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、職員がいじめ未然防止に対する意識を向上できるようにした。③児童の小さな変化を逃さないような体制づくりに努めた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが中心となって行う示範授業を参観したり、授業力向上のための研修を計画したりし、月1回程度の活動を継続して行う。②教務会を定期的に行い、学校運営に関わる案件の計画や共有を行う。	①月1回程度行われたメンター研修では、授業づくりや指導のポイント、困っていることなどを中心に会議を進めていた。今年度は、指導主事の先生に相談していたが、校内研修の計画・運営を学んだ。②教務会を定期的に行い、学校運営に関わる案件の計画について話し合いより良い運営の仕方について話し合った。	B
地域連携	①六つ川中学校ブロックの児童生徒が中心となってリーダー会議に参加し、「あせかけ運動」を連携して取り組む。②地域コーディネーターを中心に学びの支援ボランティアと連携して校内での学習補助を行っていき、よりよい学びや学習環境につなげていく。また、50周年に向けて生活科や総合的な学習の時間などの学びに、地域とのかかわりがもてるようにする。	①年度初めに各委員会の委員長が六つ川中学校へ行き、リーダー会議に参加した。本校では「あせかけ運動」の『あいさつ』に重点を置き、全校児童で取り組んだ。②学びの支援ボランティアと連携し、よりよい学びの環境づくりを行ってきた。また、地域の方や卒業生とのかかわりを大切に、50周年記念式典では登壇していただいた。	B
児童指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向けて指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆修正を行う。②児童理解の定例会を設け、児童の状況を共通理解する。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。	①スタンダードを基に、児童指導委員会で児童の様子を共有し、指導環境を整え、内容の加筆修正を行った。②児童理解定例会を実施し、全職員で児童情報の共有を月1回以上行った。③YPアセスメントを年2回以上実施し、児童理解と具体的な支援・指導を実践した。	B
特別支援教育	①手立ての引継ぎや校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対しての共通理解を図る。②特別支援教育支援員やボランティアの活用を図り、校内支援体制を整える。③児童や保護者の困り感に寄り添い、そよざルーム(特別支援教室)において個別に応じた学習支援・登校支援指導の充実を図る。④外国籍や外国につながる児童一人ひとりの状況を的確に見取り、児童本人の日本語力向上支援および保護者支援の充実を図る。	①校内で年間計画を立てて、共通理解を定期的に行う仕組みを作り実施した。②特別支援教育支援員やボランティアの活用をし、適切な配慮をできるように専任中心に校内支援体制を整えた。③特別支援教室担当の教諭を中心に学習支援・登校支援を行った。④国際教室担当の教諭を中心に外国籍や外国につながる児童の支援を行った。	A
情報教育	①子どもが興味をもった課題を解決するために、情報機器を活用して必要な情報を取捨選択し、活用できるようにする。また、ロイロノートに授業の足跡を残したり、振り返りを書いたりすることで、学びの継続を行っていく。②情報機器の正しい使い方を理解し、利用のルールを守ってICT機器を活用していくことができるようにする。	①情報活用能力の向上のために、ロイロノートを中心に様々なアプリやサービスを使用した。また、個別最適な学習の実現に向け、デジタルドリルを試験運用した。②機器の望ましい使い方をその都度指導し、概ねルールを守ってICT機器を活用することができた。	B
ブロック内評価後の気付き	六つ川中学校ブロックでは「これから身に付けさせたい基礎力」の具体的な子どもの姿について、中学校卒業時の目指す姿をもとに接続を考え、各小学校で『自立』と『協働』に焦点を当てた子ども像を設定した。授業研究会では、その姿が見られた場面やその姿に近づいたための手立てを中心に話し合いを行った。また、今年度の新たな取組として、中学校と小学校が連携して「あせかけ運動」について話し合う場を設けた。本校では、『あいさつ』に重点を置き、人権委員会を中心に取り組むことができた。		
学校関係者評価	小中一貫ブロックでは、授業改善やあいさつを中心とした児童生徒指導、研究的取組の推進を通して、主体的な学びや基礎力向上に取り組んだ。一方、児童生徒の減少、人材育成、教職員と児童生徒の認識のズレ、家庭との連携の難しさなどが課題として共有された。次年度に向けては、各部会の課題整理と役割の明確化、計画的な引き継ぎ、地域との協働強化、あいさつ・対話力の育成を継続し、小中の連携をさらに深めることが求められる。		
中期取組目標振り返り	今年度は、「自ら学び ともに考え 行動する台小の子」の育成をめざし、授業改善・児童支援・地域連携の各面で前進が見られた。授業では、単元のめあてや振り返りを大切に、子どもたちが自ら学び方を選んで進める姿が増えた。道徳では考えを深めるための学習方法を試行錯誤しながら、研究を進めてきた。地域の方々との活動やキャリアパスポートの活用により、自分の思いを表現する力が育まれてきた。いじめ防止や特別支援の体制も整い、一人ひとりを支える環境が充実した。来年度も、対話的な学びや健康づくりをさらに推進し、子どもたちが安心して成長できる学校づくりを進めていく。		

重点取組分野	令和 8 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①単元目標を明確にし、その中で伸ばす資質・能力を明確にした授業づくりを目指す。本時のめあての確認と振り返りの時間を設け、子どもが判断したり、選択したりしながら主体的に学びを進められるようにする。②「自ら学び ともに考え 行動する台小の子」をテーマとし、主体的、協働的に自己調整力を高めようとする姿勢を育成する。	①単元目標を明確にし、その中で伸ばす資質・能力を明確にした授業づくりを目指す。本時のめあての確認と振り返りの時間を設け、子どもが判断したり、選択したりしながら主体的に学びを進められるようにする。②「自ら学び ともに考え 行動する台小の子」をテーマとし、主体的、協働的に自己調整力を高めようとする姿勢を育成する。	
道徳教育	①「考える道徳」「議論する道徳」を目指し道徳の時間に課題を設定する問題解決的な学習を実践し、一人ひとりの道徳性を育む。②道徳科年間指導計画を見直し、自らの課題として道徳の授業に取り組んでいる計画を立てる。③重点研究会を通して多面的、多角的な見方を広げる指導ができるよう授業力の向上を図り、担任は、年1回研究授業を行う。	①「考える道徳」「議論する道徳」を目指し道徳の時間に課題を設定する問題解決的な学習を実践し、一人ひとりの道徳性を育む。②道徳科年間指導計画を見直し、自らの課題として道徳の授業に取り組んでいる計画を立てる。③重点研究会を通して多面的、多角的な見方を広げる指導ができるよう授業力の向上を図り、担任は、年1回研究授業を行う。	
健康教育	①家庭と連携し規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や保健教育、安全教育を実施する。②運動集會を柱に、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり体力の向上に目を向けたりすることができるようにする。③学校保健委員会を年に2回実施し、健康について考える機会を設ける。	①家庭と連携し規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や保健教育、安全教育を実施する。②運動集會を柱に、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり体力の向上に目を向けたりすることができるようにする。③学校保健委員会を年に2回実施し、健康について考える機会を設ける。	
自分づくり教育(キャリア教育)	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	
いじめへの対応	①学校としてのいじめ未然防止に対する方針を職員で共通認識できるように、「学校いじめ防止基本方針」を年度初めに共有する。②地域・保護者・職員・児童がいじめ未然防止に対する取組を共通認識できるように「横浜子ども会議」等、いじめについて話し合う機会を意図的に設定し、それぞれ立場の考えを「学校いじめ防止基本方針」に反映する。③いじめ認知された案件の経過観察を丁寧に行い、再発防止に努めることができるように、いじめ防止対策委員会を月1回以上定例開催する。	①学校としてのいじめ未然防止に対する方針を職員で共通認識できるように、「学校いじめ防止基本方針」を年度初めに共有する。②地域・保護者・職員・児童がいじめ未然防止に対する取組を共通認識できるように「横浜子ども会議」等、いじめについて話し合う機会を意図的に設定し、それぞれ立場の考えを「学校いじめ防止基本方針」に反映する。③いじめ認知された案件の経過観察を丁寧に行い、再発防止に努めることができるように、いじめ防止対策委員会を月1回以上定例開催する。	
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、チームメンバーが学びを深めていきたい教科領域に関する示範授業を参観したり、授業力向上のための研修を計画したりし、月1回程度の活動を継続して行う。②教務会を定期的に行い、学校運営に関わる案件の計画や共有を行う。	①5年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、チームメンバーが学びを深めていきたい教科領域に関する示範授業を参観したり、授業力向上のための研修を計画したりし、月1回程度の活動を継続して行う。②教務会を定期的に行い、学校運営に関わる案件の計画や共有を行う。	
地域連携	①六つ川中学校ブロックの児童生徒が行うリーダー会議に参加し、「あせかけ運動」を連携して取り組んでいく。②地域コーディネーターを中心に学びの支援ボランティアと連携して校内での学習補助を行っていき、よりよい学びや学習環境につなげていく。また、生活科や総合的な学習の時間などの学びに、地域とのかかわりがもてるようにする。	①六つ川中学校ブロックの児童生徒が行うリーダー会議に参加し、「あせかけ運動」を連携して取り組んでいく。②地域コーディネーターを中心に学びの支援ボランティアと連携して校内での学習補助を行っていき、よりよい学びや学習環境につなげていく。また、生活科や総合的な学習の時間などの学びに、地域とのかかわりがもてるようにする。	
児童指導	①指導環境を整えるために、六つ川台小スタンダードを基にした児童の様子を共有し、適宜内容の加筆修正を行う。②丁寧な児童理解(アセスメント)を行うために、月1回以上児童情報共有の時間を設定したり、年2回以上YPアセスメントを実施したり、各種アンケートや健康観察を活用したりする。	①指導環境を整えるために、六つ川台小スタンダードを基にした児童の様子を共有し、適宜内容の加筆修正を行う。②丁寧な児童理解(アセスメント)を行うために、月1回以上児童情報共有の時間を設定したり、年2回以上YPアセスメントを実施したり、各種アンケートや健康観察を活用したりする。	
特別支援教育	①手立ての引継ぎや校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対しての共通理解を定期的に行う。②特別支援教育支援員やボランティアの活用を図り、校内支援体制を整える。③児童や保護者の困り感に寄り添い、そよざルーム(特別支援教室)において個別に応じた学習支援・登校支援指導の充実を図る。④外国籍や外国につながる児童一人ひとりの状況を的確に見取り、児童本人の日本語力向上支援および保護者支援の充実を図る。	①手立ての引継ぎや校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対しての共通理解を定期的に行う。②特別支援教育支援員やボランティアの活用を図り、校内支援体制を整える。③児童や保護者の困り感に寄り添い、そよざルーム(特別支援教室)において個別に応じた学習支援・登校支援指導の充実を図る。④外国籍や外国につながる児童一人ひとりの状況を的確に見取り、児童本人の日本語力向上支援および保護者支援の充実を図る。	
情報教育	①情報活用能力の向上のために、ロイロノートを中心に様々なアプリやサービスを活用する。また、個別最適な学習の実現に向け、デジタルドリルの効果的な使用を図っていく。②情報モラルや機器の正しい使い方を適切に指導し、自他を大事にしながルールを守ってICT機器を活用できるようにする。	①情報活用能力の向上のために、ロイロノートを中心に様々なアプリやサービスを有効活用する。また、個別最適な学習の実現に向け、デジタルドリルの効果的な使用を図っていく。②情報モラルや機器の正しい使い方を適切に指導し、自他を大事にしながルールを守ってICT機器を活用できるようにする。	
ブロック内評価後の気付き	六つ川中学校ブロックでは「これから身に付けさせたい基礎力」の具体的な子どもの姿について、中学校卒業時の目指す姿をもとに接続を考え、各小学校で『自立』と『協働』に焦点を当てた子ども像を設定した。授業研究会では、その姿が見られた場面やその姿に近づいたための手立てを中心に話し合いを行った。また、今年度の新たな取組として、中学校と小学校が連携して「あせかけ運動」について話し合う場を設けた。本校では、『あいさつ』に重点を置き、人権委員会を中心に取り組むことができた。		
学校関係者評価	小中一貫ブロックでは、授業改善やあいさつを中心とした児童生徒指導、研究的取組の推進を通して、主体的な学びや基礎力向上に取り組んだ。一方、児童生徒の減少、人材育成、教職員と児童生徒の認識のズレ、家庭との連携の難しさなどが課題として共有された。次年度に向けては、各部会の課題整理と役割の明確化、計画的な引き継ぎ、地域との協働強化、あいさつ・対話力の育成を継続し、小中の連携をさらに深めることが求められる。		
中期取組目標振り返り	今年度は、「自ら学び ともに考え 行動する台小の子」の育成をめざし、授業改善・児童支援・地域連携の各面で前進が見られた。授業では、単元のめあてや振り返りを大切に、子どもたちが自ら学び方を選んで進める姿が増えた。道徳では考えを深めるための学習方法を試行錯誤しながら、研究を進めてきた。地域の方々との活動やキャリアパスポートの活用により、自分の思いを表現する力が育まれてきた。いじめ防止や特別支援の体制も整い、一人ひとりを支える環境が充実した。来年度も、対話的な学びや健康づくりをさらに推進し、子どもたちが安心して成長できる学校づくりを進めていく。		

重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	c1		
道徳教育	c2		
健康教育	c3		
自分づくり教育(キャリア教育)	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
地域連携	c7		
児童指導	c8		
特別支援教育	c9		
情報教育	c10		
ブロック内評価後の気付き	六つ川中学校ブロックでは「これから身に付けさせたい基礎力」の具体的な子どもの姿について、中学校卒業時の目指す姿をもとに接続を考え、各小学校で『自立』と『協働』に焦点を当てた子ども像を設定した。授業研究会では、その姿が見られた場面やその姿に近づいたための手立てを中心に話し合いを行った。また、今年度の新たな取組として、中学校と小学校が連携して「あせかけ運動」について話し合う場を設けた。本校では、『あいさつ』に重点を置き、人権委員会を中心に取り組むことができた。		
学校関係者評価	小中一貫ブロックでは、授業改善やあいさつを中心とした児童生徒指導、研究的取組の推進を通して、主体的な学びや基礎力向上に取り組んだ。一方、児童生徒の減少、人材育成、教職員と児童生徒の認識のズレ、家庭との連携の難しさなどが課題として共有された。次年度に向けては、各部会の課題整理と役割の明確化、計画的な引き継ぎ、地域との協働強化、あいさつ・対話力の育成を継続し、小中の連携をさらに深めることが求められる。		
中期取組目標振り返り	今年度は、「自ら学び ともに考え 行動する台小の子」の育成をめざし、授業改善・児童支援・地域連携の各面で前進が見られた。授業では、単元のめあてや振り返りを大切に、子どもたちが自ら学び方を選んで進める姿が増えた。道徳では考えを深めるための学習方法を試行錯誤しながら、研究を進めてきた。地域の方々との活動やキャリアパスポートの活用により、自分の思いを表現する力が育まれてきた。いじめ防止や特別支援の体制も整い、一人ひとりを支える環境が充実した。来年度も、対話的な学びや健康づくりをさらに推進し、子どもたちが安心して成長できる学校づくりを進めていく。		